1　講　演　「人生８０年時代を生きる」

講　師　　木　田　　宏　先　生

松戸市教育構想審議会顧問
日本学術振興会理事長
臨時教育審議会第一部会専門委員

只今、庄司教育長さんからご丁重なご紹介をいただきました。ご紹介にありましたように、何年も前に教育長さんが来られまして、「松戸市の２１世紀にむけての教育構想というものを考えてみたい。」というお話がありました。先程、主催者としてご挨拶されました石井会長さんはじめ、教育委員会のみなさま方また市長さんを先頭に、市の各部局の方々が非常に気持よくご協力をくださり、松戸市全体のことを教育という側面から考えてみたいと、こういうお話でございました。「私も夢のようなことをいろいろと、教育委員会の方々にお話をしてまいりまして、どこまでいくんだろうかなとたのしみに感じておりました。後程パネラーにでてこられます湯上・新井・屋敷その他のみなさんの、実質的にはこれらの方々のアドバイスによって市民のなかから選ばれました２７名の委員の方々を中心としたご討議が、ほぼまとまりかけております。これは、松戸市ばかりでなく、多くの他の都市の関係者にとって、非常に示唆にとむ報告になるんではないかと、心待ちにしておるところでございます。

今日、その最終段階を迎えて、こうした市民の集いがあるということで、お誘いを受けました。そこで、がらにもなく「人生８０年時代を生きる」という題をつけさせてもらったのです。先程、山下さんの「一病息災の健康観」というお話をうかがいまして、同じことを先に言われてしまったなぁという感じがし

ました。実は、私も統計の上では老人の部類に入るような年を迎えまして、忙しくしておりますけれども、一体どういうことなんだろうかと日々ふりかえっておるのでございます。

人生８０年という時代が、もうきている。そして山下さんのお話がありましたように、男性が７５才、女性が８０才を越えることになる。そうすると、戦後５０才にもならなかった平均寿命が、これだけ伸びたということなんですが、今、男性が７５才、女性が８０才ということで計算をいたしますと、私共の生涯を通しての時間が、男性で６５万時間、女性で７０万時間、昭和３３年頃に比べてもう１０万時間も余計に生きておるということでございます。

どうして高齢者がこう多くなってきたのでしょうか。高齢者が多くなるということは、一面ちょっと変なんですが、子どもが少なくなる時代でもあるんですね。私どもが生まれた大正の１０年前後は、出生率の一番高い時でございまして、１０００人で３５というような指数で子どもが生まれておりました。戦後のベビーブームの時代にもこれにほぼ近い１０００人で３４という出生数がでたのです。最近はどうかというと、１５を割っておるのです。これはいろいろな生活の変化がともなうのですが、２１世紀にはどういうことになるのでしょうか。

２１世紀の第一４半期の頃になりますと、日本の社会は、１５才以下の子どもよりは、６５才以上の高齢者の方の数が多くなりますね。そして、働いている人が、子どもだとかお年寄りだとか仕事から離れている人たち（従属人口）をかかえておる比率が、現在は幸いにも戦後のベビーブームの人たちが若いものですから、昨年８５年の統計で、労働可能人口に対する従属人口指数が４３％になっています。これが２１世紀になりますと６５という指数になるんです。仕事をしている年代の人、その年代の人が全部働いているんではありませんから、働いているのは６割とすると国民を支えて生きていかなければならないという、大変な時代になってきたのです。

今でも日本人は働きすぎだ、もう少し余暇を楽しめとか労働時間を減らそう、週休２日にしようというようなことを言っているんですね。働いていて、働きすぎだと言われるのもおかしな話で、そういうことで世の中うまくいくかなと、

思うんです。一生の中で労働しておる時間は経済企画庁その他の試算で２１世紀のはじめの段階では９万時間位に減るだろうと言われています。どうしてそういうことができるか。仕事を少なくして、そしてたくさんの従属人口をかかえてですね、うまくソロバンがあうのか、どうしてみんなが年寄りになっても、なんとかやっていけるんだろうかと思います。私共はちょうど一番出生率の高い大正１０年頃から、戦前・戦中・戦後を経て今日までできました。仲間たちで若くして死んでいった人もおりますけれども、幸いに生き残ったのは、今日まで元気で生きています。どうしてそんなことになったかなと思うのですが、結局、技術革新によると思うのです。

先程は、渋谷議長さんが大変示唆に富んだお話をしてくださいました。頭を使って、頭ですべてのことを乗り越えてきたんだとおっしゃるんですね。確かに、その頭を使った技術革新ができその結果、生活水準が向上したから、こうして平均寿命が長くなったのです。

お互いに人生８０年という議論をするようになりましたが、我々が生まれた頃と比べますと食料の姿がすっかりかわりました。私の子どもの頃は、まだ農繁期休暇がありまして、田舎では田植えの頃になりますと、学校の子どもまで一緒になって一生懸命田んぼに苗を植えたものでございます。ああいう状態のままで、今日まで生きていたら、おそらく平均寿命が８０才ということには、いかないのだろうと思うのです。この頃の農村では、ビニールハウスが沢山並んでおり、コンピューターで温度をコントロールしている。それで果していいのかと、考えさせられる点もあるのですが、ともかく第一次産業の農業が、ものすごく近代化してきました。

昭和３０年までは、中学校や高校を卒業した人の半分は農村に入りました。それが急に変わりまして、今日では農業に入られる方が、学校を卒業した人の２％にもならないのですね。農業人口も当然減っています。だから、日本でできる食べ物だけでは足らない。ですから本当に必要な食料の４割に満たないものですから、たくさんのものを外国から取り入れております。私どもが食べているものは、お米を除いてほとんど外国のものです。海外との取り引きが増

え、そういうことになっているのです。

丁度、３０年前近くになりますか、昭和３０年代の池田勇人総理大臣の頃に、所得倍増計画というのがありました。戦後、日本はこれからは農業立国でいこうという議論があったときに、池田総理はやっぱりどう計算しても農業立国では徳川時代の３０００万の人口を維持するのがやっとで、これからの日本には無理であると考えました。

海外からもたくさんの邦人が帰ってきて、その当時７５００万人位になっておりました。この人たちを食べさせていくためには、機械工業で生きていかなければならん、だから工業に重点を移すようにしよう。学校の卒業生の半分が農村にはいるようじゃ具合がわるい。それが所得倍増計画でございました。若者が工業のほうにいって、工業製品を売り出して食べていくようにしよう。それが誠に図にあたって、先程おはなしがありましたように、売れるんですね。いいものができる。

ところが、最近それがどのようになっているかというと、第２次産業に従事する人口というのは３３％、第１次産業が１０％ということになっています。第２次産業に従事する３３％は、池田内閣の所得倍増政策の頃と比べますと、減ってきました。世界の将来を見わたした経済学者ドラッカーという人がおられます。この人の書いたものをみますと、今の日本の工場のように、工場にいってみたらそこに人が働いていない、ロボットが働いている。自動車でもなんでもロボットがつくってくれて、人間はいらない。これからは、つくる人は３割もいらない。おそらく農業と同じように１割位になるんではないかということです。後の人は、何をするんだ、ということになりますね。第３次産業であるサービス産業に従事する、そういうことになるのです。

サービス産業については、今日みなさんのご覧になっているテレビの中でもいっぱいでてくると思います。戦後ラジオ、テレビが普及して、アナウンサーとかプロデューサーとかいう人たちの職場が、ずいぶんとひろがりました。ドラマを書いている人たちもおられます。挿絵を書いている人たちも、いっぱいおられます。今朝、テレビを見ておりましたら、ホテルの中にビジネスコーナ

ーというのができて、ホテルにきたお客さんにファクシミリをただで貸しておりました。

翻訳は、翻訳機を使ってすぐ商売ができるようにサービスをしていました。いたれりつくせりのサービスです。情報化がもっとすすんでいくと、コンピューターのマイクロチップを使った小さな機械によって、大きな仕事がどんどんすすんでいくし、人間の手間もはぶけるようになります。人間は何をしているんだというような方向に、世の中が急に変わっていってるんです。こういう我々の職場や生活の変化によって、私どもが生まれた頃には想像することもできなかったような素晴しい生活水準を維持しているのです。

私は千葉県に住み着いてしまいました。私は戦争から帰ってきまして、文部省に入れてもらったのです。その時千葉におられたお世話になった人のところへいくと、千葉県というのは食べ物がある、おいもを売ってくれるいいところだと言われました。私はいもが大好きですし、幸いに以前から千葉で勤めさせてもらっていたこともあるし、ちょっ考えたんです。東京へかえることになったけど、これは千葉県の県境からむこうへ入らない方がいい。その時、私は20年もすれば戦争になるかも知れない位のことを思っておりました。過去のいろいろな歴史から考えてみて、もういっぺん食べ物に困る時がくるぞ。そしたらこの江戸川の境というのは大変大事だ。東京に入らない方がよろしいと思いました。以来、松戸市のお隣の市川に住んでおります。

しかし、私のそうした予測と現実はまるで違ってしまいまして、現在、こんな素晴しい生活ができるようになりました。これが「人生８０年」をつくっていると思うのです。しかし、その基本に一体何があるのでしょうか。先程スライドにもでてきたような、医療衛生関係の革新というのは素晴らしいものだと思います。そして、同時にそれは教育がすすんできたので、相当のことができる訳です。

これはどこの国の人も不思議がりますけれども、日本で文盲の人は、まず数字を出してみたってコンマ以下の数字しかでてこないということですね。不思議がるんです。アメリカやカナダのような先進国と思われるところでも、１割

近い文盲がいると言われています。まして、中国やインドは、猛烈な数になっている。日本は、あんな難しい漢字なんか使っているから頭が固くなるんだと、外国の人に言われたのですが、そうは言えないようです。日本の教育は素晴らしいなあと思います。

ただ、これも大きな変化が起こっております。テレビ時代を迎えて字を読むことが、だんだん弱くなってきているという現象が、いくつか起こっています。つい数日前の新聞でも、「算数が嫌いになっている。それも文章で書いた質問がでると答えられない。よその国の子どもよりも文章題の正解率は悪い。」ということが報道されていました。国立教育研究所の室長が担当して、国際比較をやっておりますが、国内の調査でも同じです。それはどこからくるかといえばテレビですね。

今やコンピューター時代です。小説もカセットテープにふきこまれて、作者の書いた文字でなくて、声で聞こうという時代になりつつあります。日本人は、昔から目で字をみることによって言葉をマスターしてきて、全部の人が読めるようになったのです。それが素晴らしい知的水準となったのですが、テレビなどによってだんだん読むことより聞く方に重点が移っている。だからこれからは大変かな、という意見があります。

しかし話のついでに脱線しますと、そのファクシミリだとか、ワープロだとか、コンピューターだとかいうのは、漢字を教えてくれるんですね。私どもが、自分で原稿を書こうと思いますと、なかなか漢字が使えないんですが、ワープロで打ちますと、バラバラと漢字がでてきてくれますから、ああ、こういう字だったなと思います。

これからは、みなさんもタイプライターのかわりにご家庭やお仕事のうえで、お使いになります。このように、情報化がすすむことによって、漢字がよみがえるという側面もありますから、私のように心配ばかりしていることはないのかも知れません。

いずれにしても、医療を例にとっても、教育というベースがあって、そしてそのベースの上に技術がすすんで、衛生環境が非常によくなった病院ができた。

ただし、これで万事ＯＫかというと困るんですね。というのは、病院へ行くと立派になっているんですが、夜、お医者さんが往診してくださるなんていうことがなくなっているのですね。そこで我々の世代の人たちは困るんです。自動車の運転もできませんし、年よりをかかえて生活していて、具合が悪くなったときには、もうどうしていいかわからん、というような世の中になってきています。ですから、一面ではすすんだということもありますけれども、一面では困ったことが起こりつつある。世の中が、プラスにも動くし、マイナスにも動いている。その動きが非常に大きい。

今、私どもが気づきますのは、技術革新によって素材を使うことが少なく効率がよくなってきたことです。丁度１０年程前になりますか、大平さんが総理で東京サミットを開きました時に、ペルシャ湾でイランとイラクの戦争がはじまりました。ＯＰＥＣ（石油輸出国機構）の動きがありまして石油が入らなくなる。そうすると、日本は今日の経済規模を維持できないかも知れない。そこでヨーロッパの国々に頭を下げて、日本が必要とする石油量はこれだけとお願いしたのです。３億７千万バーレルでしたかね。ちょっとその数字がはっきりいたしませんが、そういう注文をしたのです。ところが、現在はどうでしょうか。なんとそれよりもはるかに少ない石油で、より多く生産をあげているのです。

今朝のテレビの番組でやっておりましたが、昔あの太い銅線でいろんな電気を送っていたのですが、今は光ファイバーの時代ですね。百ポンド足らずの光ファイバーで、１トンの銅線が運んでいたのと同じエネルギーをはこぶことができる。コンピューターも最初は大きなワット数がいったのです。１台動かすのに１０ワットというエネルギーがいった。今、１０ワットの電気があると１万台のコンピューターが動くのです。１万倍の仕事ができるようになったのです。人間の知恵で、原料を使うということが少なくなっているのです。経済的で、しかも効率のいいものをというように、大きな変化が起こっているのであります。

こういう変化の中に、先程お話がありました、生まれたばかりの赤ん坊から

私どものような高齢者まで生活をしておる。そこで、振り返って教育というものを考えなおさなければならないのです。今、臨教審でもそれをやっているのです。これまでは、幼少の頃から未成年の間に学校で教育を受けて、教育を受けたら一人前になって社会にでて、仕事をして、定年になったらやめるという人生のサイクルの中で考えておりました。ところが、世の中がこういうふうに変わってきますと、今私が申しあげたようなサイクルで教育を考えるわけにはいかないのです。なぜかというと、６０才までの人だけが働けばということでは、もたなくなるんです。

勿論、人間は幼い頃に、一人前になる準備をするんですから、この時期に学校できちんとした基礎基本を身につけておかなければならないのですけれども、職場に入って、５０年の間仕事をしようと思うと、その間に世の中はみんな変わってしまうのですね。石炭産業で日本の戦後を起こしたわけですが、その石炭の鉱山がみなつぶされました。そして鉄鋼が日本の支えになったんですが、今や青息吐息というような状態になっている。

自動車が、今凄まじい勢いで世界を席巻しておりますが、やがて外国に追いつかれるかも知れません。ですから、一人の人間が４０年前に勉強したことで４０年間仕事をやっていくということ自体が、成り立たなくなっている。しかも年をとった人はご隠居さんになってみんな働く人のお世話になるのではどうにもならない、やりきれない。

そこでどういうふうに考えなければならないかといいますと、幼少期から職につくまでは学校教育で体を鍛えたり、勉強の基礎をきちんと養うということが大事なんですけれども、本当の勉強は、仕事を始めてからということになるんですね。いろんな職業について仕事を始める。そしてその仕事に必要な勉強を、その都度ずっとやっていかなければならんという世の中に、現になっている。それが、企業内教育とか在職研修とかいうことです。ところが今では、職場が次々と生産を変えていかなければならん。新日鉄がですね、鉄を作っている部分を半分位に減らして、他の事に取り組まなければならんということになりますと、企業内訓練で自分の職場の社員の教育は自分がやっていくというこ

とだけではもたなくなってしまった。大きな企業は、製鉄企業にしてもそうですし、電気産業にしてもそうですが、もう素晴しい社内研修施設をもっていて、学校よりも立派な教育訓練のシステムで社員を教育しております。５年おき位に再教育をするというシステムでやっておる。

ところが、企業によっては５年先、１０年先のことまで教育訓練をしていく能力はありません。特に、これから新しいエネルギーを支えていくのは中小企業でありまして、そこから新しい知恵がでてくる。そういうところでは、そんな２０年も３０年も先まで社員を抱えてどうこうということは考えてやれない。

ですから企業内教育にしても、自己完結的な企業内教育だけではだめなんですね。社会のシステムとして、新しい対応がとれるようなものを考えておかなければならない。今までの大企業中心の社内教育だけを考えておったんでは、これからの大きな変化に対応できない。それが教育に課せられた課題です。人間は、生涯勉強していかなければならない。年をとって何がしかの仕事ができて、何がしかの社会参加ができて、そしてみんなの手だすけになるように他人の負担を少なくしていければいい。年金の負担といったって、自分が稼いだ時に入れた年金だからいいだろうと、お考えになるのは間違いです。年金は働いている人が負担していて、給料から差し引いたものが、今のお年寄りの年金になるのです。一番最初にパンクしたのが国鉄です。国鉄はもう年金が払えなくなってしまいましたが、公務員も段々似たようなことが起きてくる。今、60才で定年にしていますが、それではもう立ちいかなくなります。少数が多数の人を支えるような世の中になって、少数の人におんぶして高齢者がみんな年金よこせと言っても、そんなことはできません。みんなが負担を少なくするという方向で、将来を考えていかなければならない。

今、困ったことに学校の授業料も大変高いんです。ですから、サラリーマンは子どもの教育と住宅費にものすごい金がかかる。自分が勉強する経済的な余力もない。しかし、仕事のあい間にずっと勉強をして、常にコンスタントにある状態で仕事ができるようにしていかなければなりません。数日前にテレビをみておりましたら、シルバーの従業員だけをとっているホテルが、出ておりま

した。従業員は全部６５才以上なんですね。その社長さんも６０才を越えておりました。確かに、ホテルの仕事はなにも若い人でなくてもできる。受付に座って、夜お客さんがきても、電話の受け継ぎ位はいつでもできる。その人は、放送大学の番組で、勉強しながらホテルのシルバー従業員をやっていらっしゃるということでした。このように、元気な間はこの社会を支えていく。そうすれば素晴らしい社会ができる。こういう方向に進んで行かざるを得ないんだなと思いました。その意味では、今まで当り前と考えていたことも全部切り替えなければなりません。学校でしっかり勉強しなければもちろん後々のことができませんが、けれども、本当の教育というのは自分で勉強することである。人から教わるというのは準備段階のことで本当の教育は自分で勉強すること。自分が、あらゆる情報や教師の指導、或いはテープでもいいのです。それを取り入れて、そして、自ら学習を継続することによって、自分の行動能力を高めるということです。その意味で生涯学習という考え方を広めていくというのが、臨教審の基本のトーンでございます。

これは、すぐ明日からシステムをこう変えたらいいということではございません。むしろ、どういうふうに変えたら、どういうふうになっていくかということを、それぞれの人が工夫し、助け合っていくほかない。

私はその意味で、松戸市の教育構想審議会というご発想に大変期待を寄せております。私が申しあげましたような意味で教育を考え、学習を考えれば、自分の生活が全て学習活動なんですね。学習によって仕事が進んでいって、それによって必要な収入も入ることになりましょう。学習によって健康を維持していくことができ、そして人のお世話もできるようになりましょう。そうすると、生活の中に全部学習が入ってくる。教育というのは、生活そのものだ。そのレベルを高める努力が、自分の学習であり、教育である。そういう発想で教育を考えていかなければならない。そういう時にどういうことが必要な知識であるかは、自分で探しあてなければなりませんけれども、また、それが適宜手近なところに提供されてくるということが必要なんですね。今日では、人間がどういうところからどういう知恵を得ているかといいますと、少しデーターが古い

んですけれど、生活の情報量はテレビで6割をもたらしているんです。お互いに職場で声を交わしたりすることによって2割、学校教育で1割という状態なんですね。ところが、今やそのテレビの情報では足りずコンピューターという素晴しい機能をもつものができたものですから、コンピューターをうつと自分の必要なデーターがでてきます。文字放送がテレビで始まりましたね。ファクシミリを使うとそうなんですけれど、手紙のやりとりも簡単にできますね。ですから、これからはもっといろいろな意味で情報がたくさんでてくるのです。そのなかから、自分に役に立つ情報を上手に選り分けて使っていくのです。そのために、情報を提供するシステムを考えなければならない。

教育長さんからいろんな構想を聞いたとき、私は、松戸の市民のために、市民生活では、何が必要な情報で、どこへ行ったら一番手軽に情報が得られるかということを、システムとして考えていただきたい。それは学校でもいい、公民館でもいい、こういう文化会館にあるビジネスコーナーでもいいですね。案内コーナーでもいいのです。例えば松戸のどこで、どんな音楽会があります。囲碁を勉強したい人のためには、松戸のこういうところに囲碁教室があります。夜間病気になったときの診療等、その都度別々に聞かないとならんというのは大変困るんですね。もっとそういう情報をパッと使えるようにすれば、みんなの役にたち、時間を無駄にせず、効果的な活動ができるようにすすんでいきます。情報が提供されれば、自分で自分の行動ができるようになるのです。

その時に一番大事なことは何か。それは学習として考えますと、自分の日常の生活に役に立つ実学ですね。

技術の習得ということも必要だし、どこへ行ったら何が買えるという実務的な知識も身につけなければなりません。今日では自動車の運転も、飛行機の操縦も、工場の機械の操作にしても、みんなちゃんとやれるようになっております。そういう実学の教育、これは社会がすすむと共に、社会の変化に対応して勉強しなければならない。

第二番目は健康ですね。生きている限り、自分が動けるような状態にしておかなければならない。健康というのは、自分がやらない限り、絶対に他人がや

ってくれないんです。確かに、お医者さんがいて、薬はくれます。私も決して健康な方ではありませんから、始終お医者さんの世話になっております。しかし、つくづく考えてみると、自分の健康上の弱点を、どうやって克服するかという毎日の実践を繰り返さないと、健康にならない。食事に気をつけるということも、その一つかも知れません。或る町では高血圧の人を少なくして、健康保険料の町の負担を減らしたい。そのためには、食事の教育を町民にしているということでございました。なかなか、深慮遠謀ですね。食事療法の教育をすることによって、この町の国民健康保険料の負担は軽くなる。大変結構なことです。

要するに健康は、仕事と同じでありまして、自分が自分でやらない限りは、他人がしてくれないのです。どうやったら健康を維持できるかといえば、自分なりにスポーツをやり、乾布摩擦をし、体操をし、食事療法をし、お稽古をし、鍛えるということを自らに課さなければならない。ですから、生きていくためには、まず基本的にはその職業に必要な知識と、もう一つは健康、この両者を市民生活の中で合致させなければならないのです。

それでは、それだけでいいかというと、私は、足らないと思いますね。私なんかも一体何のために忙がしい思いをしてクルクル回っているのだということをいつも思い知らされます。一体生きているってどういうことなんだろう。自分が生きているという自分なりの意味あいは、どういうことであるかということを考えないわけにはいきません。生きている意味あいを考える時、自分はどうやったら実現できるかということから、趣味という問題も起こってくるのでしょう。

大変困ったことなんですけれども、機械化、あるいは技術の進展によって、一人ひとりの生活がバラバラになりつつあるのです。家庭の崩壊ということも言われております。アメリカでは、今結婚したカップルの半分が二度目の結婚をするそうです。今の動きで行くと、２１世紀には一生のうちで２回結婚するようになる。ですからアメリカの人に逢う時に「あなたの奥様は、この頃どうですか。」と、うっかり聞いてはいけない。それがモラルだそうです。モラルというのも変わったもんだなあと思うんです。

日本も、そこまでバラバラになってはいかん。少なくとも家庭という核をきちんとして、そしてコミュニティ（地域社会）を上手に使っていかなければいけない。情報がコミュニティ（地域社会）にひろがり、そこに人の温もりが広がれば、市民生活も楽しくなりますね。松戸に団地ができましたころ、私は社会教育を担当していまして、社会教育研修所に集った各県の研修員に、後で話されるパネラーの湯上さんもそうなんですけども、お願いをしました。豊四季団地へ行って、あそこに入った一番バイタリティのある若い市民の生活サイクルがどうなっているのかを調べてくれと頼みました。

あの当時造られた団地は、ベッドルームみたいな恰好になっていて、そこには、コミュニティ（地域社会）がないんじゃないかと思ったからです。例えば、スーパーに一番近い人たちがどうあればいいのかということも、社会生活として考えなければいけないことです。いろいろな調査をしてもらって、大変おもしろい結果を得ました。団地に入られた方々は、どうしてもグループが欲しくなる。いろいろなグループができるんです。それで段々カラーがでてくるのですが、カラーが強くなると、グループがこわれてしまいます。いいグループをどうやってつくったらよいかが、市民生活を気持ちのよいものにするために、非常に大事なんですね。子どもの頃や学生時代のような友達を生活の場で常にもっているのは難しいことです。それでは困るんです。もう少し気持ちよく付き合えるということを考えなくてはいけないと思うのです。

この付き合いをどういうふうにしていくか。べったりと付き合うのは、大人の市民生活としては難しいですね。かといって、顔を合わしても挨拶一つない付き合いも、困ったものです。今は、向う三軒両隣りという言葉が消えて、何かあったら電話で交番へ「１１０番」ということになるんですね。しかし、それでいいでしょうか。確かに夜中に子どもが病気になったら、ＳＯＳといわなければいかん。しかし、そういう付き合いだけでいいのかと感じます。どうしても、人間はあんまりべったりでなく、しかも、あんまりよそよそしくなく、市民生活をつないでいくコミュニティ（地域社会）を上手につくらなければいけない。

私共の子どもの世代をみてますと、我々親の世代が一人であくせくしたのとは違って、上手に仲間と付き合っていると思います。子どもを介して、幼稚園や学校の子どもを介して、親御さん同士もうまく付き合っている。

この頃は核家族ですから、一家の主婦が一週間も入院するとなったら、みんなお手上げになってしまうのです。そんな時、助けあって子どもを自分の家へつれてきて、お世話をする姿をみておりますと、我々も年をとって余計な心配をすることもないと、思うのです。

日常生活を人間的な潤いのあるものにしていくことは、これからの社会の中で大変大事なことです。それが教育の課題であり、学習の課題であり、コミュニティ（地域社会）をつくっていく課題だと、私はこのように思うのです。

そして、情報時代ですから、いろいろな情報をみんなが使いやすくする。これが生涯学習にとって大事なことであり、また２１世紀の市民生活を素晴しく気持ちのいいものにしていくと、思っています。

近くまとめられます松戸市教育構想の答申を、これは紙に書いただけですから、どう実践していくのか。なんとか、日本でのよいサンプルが松戸にあると言えるように、これから数年間のおほねおりを期待したいところでございます。

ご清聴ありがとうございました。